

氏 名 ^や ^{まき} ^{かず} ^{ひこ} 八 巻 和 彦
 学位(専攻分野) 博 士 (文 学)
 学 位 記 番 号 論 文 博 第 373 号
 学位授与の日付 平 成 12 年 1 月 24 日
 学位授与の要件 学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
 学位論文題目 ニコラウス・クザーヌスの世界像の研究

論文調査委員 (主 査) 教 授 藺 田 坦 教 授 山 本 耕 平 助教授 川 添 信 介

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、15世紀の西ヨーロッパにおいて哲学者、教会政治家として活躍したドイツ人思想家ニコラウス・クザーヌスが、その思惟によって把握・構築し、また実践においてそのうちに活動した「世界」を研究せんとする試みである。論者はここで、クザーヌスとその独自の思惟によって形成した多面的な思想世界と、彼の多彩な活動が展開された実践世界とを重ね合わせつつ、それらをクザーヌスとそのうちに生きた一つの「世界像」として取り出し、これを記述的かつ総合的に考察・解明せんとしている。その内容は、本論文全体の目的と方法を示す序章と、その具体的考察を展開する六つの章から成るが、大まかに言って、クザーヌスの思考全体の根本構造と基本的特質を原理的に闡明・考察した第一章から第四章までと、それに基づいて彼が現に把握し直面した世界像を総合的に把握・描出した第五・六章とに大別することができるであろう。以下は、その概要である。

まず序章「本研究の目的と方法」では、クザーヌスに特徴的な思想の多面性と統一性に注目した上で、これらを「世界観」としてではなく、一つの「世界像」として研究するために、基本的に記述的な考察という方法が取られること、また彼の関心が若い時より、単に思想の理論的構築に向けられるのみならず、その実践的応用にも向けられていたという事実があるゆえに、彼の思想世界全体を理解するために、それらの両面を総合的に扱うことの必要性が指摘される。

第一章「クザーヌスにおける〈哲学〉」では、クザーヌスにとって哲学がいかなるものと考えられていたかが、彼の論述に即して探求される。論者はここで、クザーヌスが論理と理性(ratio)を基礎とする学問一般の有効性を是認しつつも、それを神・真理の探究に適用することは不適切とみなし、同時代の学者たちとは明確に一線を画そうとしていたことを示し(第1節)、同時代の典型的な講壇哲学者ヴェンクとクザーヌスとの間の応酬を通じて、彼の思惟の根幹を形成する「知ある無知」(docta ignorantia)と「対立の一致」(coincidentia oppositorum)の概念、およびそこに働いている真理探究における直接性の要求が、当時の講壇とは決定的に相容れないものであったことを明らかにする(第2節)。そこから論者は、クザーヌスの前期思想において「哲学」が「把握できないものを把握できない仕方では抱握する」営みとして、なお未完結なものとみなされているが(第3節)、中期以降には「哲学」があえて「サピエンティアの愛」(amor sapientiae)と表現され、神と被造世界と人間という三者の間の「サピエンティアの三角構造」と名づけられるべき構造の想定のもとに、より積極的に哲学的探求が進められることを考察する(第4節)。そしてこの「愛」が、「愛知としての哲学」を成り立たしめる根本的な働きであると理解されることを示し(第5節)、さらに晩年には「サピエンティアの狩」という表現を用いて「励起と修練としての哲学」という彼の哲学の理想像にまで展開されていったことを明らかにする(第6節)。

第二章では、被造世界の多様性をいかに理解すべきかというクザーヌスの生涯を通じての難問を、「〈diversitas〉問題」と名づけ、彼がこれをいかに思索したかをほぼ全時期にわたって考察する。まず、最初期の代表作『普遍的協和について』では、万物がその相異性にもかかわらず神によって協和に向けて造られているという彼の実感は語られるものの、その理論的解明はなお不十分であることが指摘され(第2節)、ついで前期の主著『ドクタ・イグノランティアについて』では、問題の解決が試みられながらも、多様性は最終的には「偶然的である」と述べられるにとどまり、さらにそれに続く『推測について』では、「一性と他性」という新たな思考枠が導入されて問題の解決が図られるが、「他性」の根拠という新たな問題をか

えて顕在化させることが指摘される（第3節）。ところが前期中葉の著作『創造について』において、この問題に対するクザヌスの視点のドラスティックな転換が現われ、多様な存在者の一々の自同性のうちに絶対的同者としての神の現われが見られ、すべての被造物が多様なままで創造者へと呼び寄せられるという積極的な考えが見て取られる（第4節）。さらに中期以降におけるこの問題への取り組みが考察され、存在者の多様性は、神の創造の結果としてすでに十分な根拠があるものとみなされ、その多様性を安んじて前提しつつ、現にある多様性の総体をもって神を賛美すべきであるとするクザヌスの基本的姿勢が浮き彫りにされる（第5節）。

第三章「方法としての〈coincidentia oppositorum〉」では、「ドクタ・イグノランティア」とともにクザヌスの特徴的な思惟の一つをなす〈coincidentia oppositorum〉（対立の一致）について、基本的にクザヌスの記述に即して考察がなされる。論者はまず、従来見過ごされがちであったこの思惟の用語上および思想取り扱い上の問題を指摘したのち（第1節）、この「一致」には、二つの対立が一つの〈もの〉に完全に融合し解消するという意味と、二つの対立が一つの場に出会っているという意味があることを論証し、それらがキリストという存在との関わりで重要な意味をもつことを指摘する（第2節）。さらにこの問題を、とくに中期の著作『神の観について』を主たる対象として考察し、「対立の一致」には、内容的に「水平的なそれ」と「垂直的なそれ」との区別があり、前者は、従来しばしばそう解釈されてきたように神において成立するものではなくて、むしろ人間の知性の限界において成立するものであり、また後者はキリストの存在を前提として説かれ、従って単に認識論的な意味ではなく、むしろまずもって存在論的意味を有するものであることが明らかにされる（第3節）。最後に以上の考察を踏まえ、「対立の一致」の思惟が、先の〈diversitas〉問題を解決するための「媒介」という役割を担っていることが結論され、その際、キリストの存在が重要な位置を占めることが指摘される（第4節）。

さらに第四章「楕円の思考」では、クザヌスの思考構造の特色が総括的に考察される。論者はまず、クザヌスの思考において、自己の立脚点を一旦いわば「中心」と捉えた上で、これを相対化するという営みが種々の場面で遂行されるという特質に注目し、これを「脱中心の思考」と名づけてその具体例を考察する（第1節）。そこから、この「脱中心の思考」が単なる果てしない自己相対化にとどまるものではなく、むしろ豊かな思想的な成果をもたらすことを彼に可能にしている思考構造を「思考の二極性」と特徴づけて、これを考察する。これが「極」と表現されるのは、人が思考に際して、一つの立場を選択せざるを得ないとしても、それに対応する立場がもう一つの極として必然的に想定され、場合によってはあえて設定されねばならないと、クザヌスは考えているからである。そしてこの思考法のなかに、クザヌスに特徴的な二肢の思考枠組みもまた位置づけられると見られる（第2節）。さらにこの「思考の二極性」は、クザヌスの存在論的な場の解明に適用され、すべての存在者は互いに相異なって存在しつつも、それぞれが最善なるものとして現存しているという彼の存在者観を基礎にすれば、互いに対立を形成する思考主体が、楕円を形成する二つの焦点（極）に相当すると考えられ、そこに「楕円の思考」が成立する。ここからこのような思考によって、「対立する両者」が「一致」に向けて進むという現実の世界に対する彼の把握の具体例が考察される（第3節）。

以上のようなクザヌスにおける思惟の根本構造と特質の解明を踏まえ、さらに彼の「世界像」の総合的な把握・描出が具体的に展開される。まず第5章「〈apparitio dei〉の諸相」においては、神は世界に対して隠れているとともに、世界に現われているものでもあるという、前期の「ドクタ・イグノランティア」の立場に見られた矛盾的と見える思惟が、中期以降においては、その基本を維持しつつも次第に「神の現われ」（apparitio dei）としての世界という思想に重点が置かれる形で克服されていくことが指摘される（序節）。そこからまず、「世界」という「神の現われ」が考察されるが、その際とくにクザヌスが世界を、神が著わした書物に喩えていることに注目し、この比喻における世界という書物の解釈が意味するところを考察し、それが単なる文字上の読解でないこと、つまり彼の哲学の目的が単に被造世界の解明にとどまるものでないことが示される（第1節）。ついで、世界に内在する「秩序」こそが、クザヌスにとっての本来的な「神の現われ」であることが指摘された上で、この秩序の理解に密接に関わる数学および数についての彼の理解の諸展開を考察し、これらが第一章で摘出された「サピエンティアの三角構造」の思惟に相即するものであることが闡明され（第2節）、さらには「人間存在」もまた「神の現われ」という視点から考察され、ここでは人間の精神がいわば神との直接的な関係において特権的かつ典型的な「神の現われ」であるとともに、身体を有するものとしての人間存在が、被造世界との関わりにおいて「ミクロコスモス」と見られることによって「神の現われ」となり、人間はいわば二重の意味で「神の現われ」の結節点である事が解明される（第3節）。

最後に第六章「〈concordantia〉としての世界」においては、クザーヌスによってこの世界の総体が、重厚壮大なポリフォニーからなる「協和」(concordantia)の世界として把握されていったことが考察される。まず、カッシーラーによるクザーヌスの「個物」の意義づけを前提としつつ、クザーヌスにおける「個物」が内に三一的構造という「協和」を有して存在することを指摘し(第1節)、ついでこれらの個物同士が、互いに相違し対立しながらも、引き寄せ合うことによって「水平的協和」を成して存在するとともに、宇宙的な秩序においていわば「垂直的な協和」をも形成すると見られ、もろもろのカテゴリーや、全体と部分の関係もまた協和と想定されることによって、クザーヌスの思考が効果的に拡大・深化されていることが見て取られる(第2節)。さらには認識もまた、クザーヌスにおいては「協和」として把握されており、人間の認識活動においても、その根底に働く「愛」すなわち「結合の精神」が重視されるところに彼の思考の特色が見出され、これが第一章以来クザーヌスの「哲学」における直接性の要求として論及してきた事態に他ならないとされる(第3節)。最終節では「〈diversitas〉から〈concordantia〉へ」と題して、以上の諸考察を踏まえてクザーヌスの「世界像」の特色がまとめられる。ここで一方では、すでに彼の初期の思想において人祖の墮落を「協和」から「不協和」への墮落と捉える見方が見られるが、その「不協和」が「協和」へと向かっているという認識が中期とともに現われることが指摘されるとともに、他方では時間もまた、キリストの生涯に対応して終末に到ると予想されることによって、神との「協和」において把握されていることが指摘され、かくしてクザーヌスにとっての「世界」が、その総体として空間的にも時間的にも〈apparitio dei〉としての壮大な「協和」であると理解され、構想されていることが確認される。また以上の考察の結果に基づいて、クザーヌスの思考の進展過程そのものもまた、遡って「〈diversitas〉から〈concordantia〉へ」として捉えられ得ることが示唆されている(終節)。

論文審査の結果の要旨

15世紀ドイツの思想家ニコラウス・クザーヌスは、多方面にわたる独創的な思考と活動の人として知られている。すなわち一方では、彼の思想は、しばしば指摘されてきたようにきわめて多面的にして独創的であるとともに、他方また、ローマ教会の高位の聖職者にして教会政治家であった彼の実践活動も、すこぶる多彩にして独自のものであった。本論文は、このようなクザーヌスがその思惟によって把握・構築し、また実践においてそのうちに活動した「世界」の全体像を解明せんとする試みである。論者はここでその思想世界と実践世界とをいわば重ね合わせつつ、これをクザーヌスがそのうちに生きた一つの「世界像」として総合的に考察し、できるだけ記述的に描出せんとしている。そのため論者は、クザーヌスの生涯に及ぶほとんど全著作を考察の対象として取り上げるばかりか、これまでの多くのクザーヌス研究においても必ずしも十分に眼の届いていない彼の数多くの説教(Sermones)にも注意を払い、その考察を繰り広げている。この点は、クザーヌスの理論的世界のみならず、実践活動の世界をも視野にいてその総合的な「世界像」を捉えようとする本論文の意図にとって、きわめて適切な手法であり、また意義深い試みと言えよう。全体の構成は、本論文の目的と方法を示す序章と、その内容的考察を展開する六つの章から成っているが、これらの六章は大まかに言って、クザーヌスの思考全体の根本構造と特質を原理的に闡明する第一章から第四章までと、それらに基づいて彼が形成し直面した「世界像」を総合的に把捉し描出する第五・六章とに大別される。全体を通じて見られる詳細にして精緻な論及と、随所に独自の知見と洞察を示した考察は、以下のような特徴的な成果をもたらしている。

1) まず第一章から第四章においては、クザーヌスの独自の哲学的思考の根本構造が、彼の哲学観の進展についての検討、〈docta ignorantia〉(知ある無知)や〈coincidentia oppositorum〉(対立の一致)という彼特有の思想の考察、そして論者自身が「楕円の思考」と名づけるクザーヌス的思考の特徴的な把握などを通じて、きわめて周到かつ精緻に解明されている。

2) とりわけ中期以降のクザーヌスにおいて、哲学が「サピエンティアの愛」(amor sapientiae)と表現されることに注目して、神と被造世界と人間の三者の間に「サピエンティアの三角構造」と名づけられるべき構造を想定し、これを論者自身のクザーヌス解釈の基本的思考枠としたのは、論者のオリジナリティを示す卓見であり、きわめて意義深いものがある。

3) クザーヌスの最初期から晩年に到るまでのほとんどすべての著作に目を通すことによって、彼の生涯にわたる思想的変遷を見渡し、ほぼ時期ごとの思想的発展を跡づけることに成功しているのも、高く評価される点である。

4) さらに上述のように、クザーヌスのほぼ全時期に残された数多くの説教を取り上げることによって、修道院における説教という実践活動を通じて彼が形成し、かつそのうちに生きた「世界」の具体相をある程度生き生きと描き出しているの

も、本論文の特徴的な成果である。

5) 後半の二章では、クザーヌスの「世界像」が総合的に描き出されるが、その一つが、「神の現われ」(apparitio dei) という視点からのものであり、ここで世界全体、世界内の秩序、人間存在のすべてが「神の現われ」として統一的に把握されるとともに、他方では、その世界像と彼の思想展開の歩みが「差異から協和へ」(<diversitas> から <concordantia> へ) という根本動向において特徴づけられ、最終的な全体的「世界像」として提示されている。いずれも壮大な試みであり、見事な成果であると言えよう。

とは言え、本論文にもなお望みたいところがないではない。その一つは、クザーヌスのほぼ全生涯における世界像形成についての、論者の記述的かつ思想発展史的な理解はおおむね説得的であるが、論者の言う「真理探求における直接性」や「楕円形の思考」といった独自の事態に関しては、いまだ少し立ち入った説明がほしいところであり、他はまた、ここで明らかにされたクザーヌスの哲学と世界像の全体が、哲学史上にいかなる意義づけを見出し、またいかに位置づけられるかについての論究である。しかしこれらは、本論文の価値ある成果を著しく損なうものではなく、むしろ論者による今後の教示を期待したい。

以上審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものを認められる。平成11年11月20日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。